

黒田荘悪党の再検討

鈴木 聡史
Satoshi SUZUKI

1. はじめに

日本史でいうところの悪党とは、平安末期から南北朝時代にかけて、主に近畿地方の荘園内に発生した悪事を働く者たちの名称である。悪党の住む地域や悪党個人によってその行動は様々であるため、一概に「悪党とは何か」という定義をすることは非常に困難である。そこで現在は、戦争・流通・経済・宗教的イデオロギーなどの分野を切り口にして悪党を検討することが多い。今回は伊賀国名張郡（現在の三重県）の東大寺荘園である黒田荘に地域を絞って、先行研究を踏まえながら簡易的に再検討したい。

先行研究

黒田荘悪党は多くの研究者によって多様な検討がなされているが、三人の研究者に焦点を当て、その概略を以下に記してみる。

中村直勝氏…黒田悪党は現地の荘民にとって完全なる悪ではなかったと指摘。^(注1)

石母田正氏…悪党は退廃的・孤立的な一面を拭いきることが出来ず、「悪党」のまま滅びてしまったと指摘。^(注2)

小泉宜右氏…石母田氏の言うような悪党だけではなく、新しい情勢に対応すべく奔走したため領主から「悪党」と呼称された者もいる。後者はのちの地方分権を引き起こすような運動になった。^(注3)

平安末期から社会の体制が崩れだすと、権威権力に対抗する民衆の精神がふくれあがり、悪党的なものへと拡大発展したものと考えられるが、検討を進めていくにあたって個人的には小泉氏の意見に同調する部分が多かった。今回は黒田荘悪党の行動とその変化に着目し、考察する。

悪党の行動

黒田荘悪党の中心となったのは御家人の大江氏と服部氏である。大江氏は黒田荘下司であったが、東大寺より委任された荘官としての職掌を越えて行動したため、下司職没収となり東大寺と対立した。服部氏も独自で所領拡大を図り、大江氏と同じように東大寺と対立した。まず、黒田荘悪党の行動の主なるものを列挙してみる。

山賊…山の中に根拠地を構え、人や民家などを襲って財物を奪う。

強盗…乱暴・脅しによって金品を奪う。

蹂躪…暴威・暴力・強権をもって他を犯す。

夜討…夜間に民家を襲って財物を奪う。

年貢課役の打止…運ばれる年貢を途中で止める。

路次の切り塞ぎ…重要路次を城郭で塞ぐ。

黒田荘悪党の行動は東大寺が出す訴状を通して知ることが出来るため、これらの行動は主に東大寺に対して行われたものとわかる。行動に注目すると、「奪う・犯す」といった暴力的なものが中心となっている。これらの行動をおこすためには、ある程度の武具を必要とする。新井孝重氏によると、当時一般荘民が武具を身に纏うこと自体が「悪」のイメージとして定着していたようである。^(注4) 黒田荘悪党の悪党たる所以は、単に東大寺に対立しているという理由にとどまらず、武具を身に纏い暴力をふるうものとしての「悪」のイメージがあったのかもしれない。

行動の変化

黒田荘悪党が活動を始めたのは、史料上では弘安年間（13世紀末）のことである。この時期の悪党に関する史料は限られているため、詳細な検討はできないが、行動をまとめると「夜討・強盗・山賊」などの単発的な行動が目立つ。東大寺としては当時の悪党を抑える武力はなく、六波羅を通して悪党追捕の武家入部を図るしかなかったが、当時の悪党は存外短期間で追捕されている。つまり、この時期の悪党は東大寺にとって脅威ではあったものの、まだ強大な存在になりえなかったことを示している。しかし、嘉暦年間（14世紀初頭）から悪党の行動は大きく変化する。嘉暦元年九月に東大寺から出された訴状には、「城郭を構え、悪党等を籠め置き、年貢課役を打ち止め…」とある。注目すべきは「城郭を構え」という文言である。この城郭は、悪党が本格的に東大寺に対抗するためにつくったものである。この「城郭」について新井氏は、「個別身体の武装（身体の延長としての住宅の武装）から、地域の武装という発展的系列でとらえることができる。」と述べている。^(注4) つまり、この城郭を作ったことによ

り、単発的な悪行から地縁的な悪行へと行動が変化したことが推測できる。さらに悪党の追捕に関して「縁者に懸け」、「(扶持人を悪党と) 同罪に処せらるべし」といった文言も記載されるようになり、単発的な悪行を脱却して縁者と共闘する悪党が発生したことがわかる。嘉暦二年になると「寺家の使者を追放」、「寺家雑掌の居所に討ち入る」などといった大きな行動が目立つようになり、東大寺による訴状が激増する。また、同時期の荘民にも変化が起こるようになる。嘉暦三年十月には、「路次を切り塞ぎ、寺家使を荘内に入れざる旨を神水起請し、一荘の土民漏れることなく悪事に加担…」と東大寺が訴状を出している。この前後にも似たような訴状が出されていることから、荘民が悪党に加担していたことが想像できる。これは、東大寺の支配が悪党によって打ち崩されつつあったという一つの事象である。

最後に、東大寺による度重なる訴状を受け、六波羅は武家に対してどのような御教書を出し、武家はどのように悪党追捕を行っていたのかを検討する。元亨四年の六波羅御教書には「起請の詞を載せ」、「もし緩怠あれば、(中略) その沙汰あるべし」とある。悪党追捕を行なうように起請させ、怠れば沙汰を下すと伝達している。しかし悪党追捕は簡単にはいかず、この後に出される御教書には、「もし遅延あれば罪科に処す」、「更に緩怠あるべからず」とある。六波羅から追捕の命を受けた武家が悪党の行動に対し苦戦をしていたのか、あるいは黙認していたのかは定かではないが、悪化の一途をたどる状況に、六波羅も痺れを切らしている様子が伺える。

総括

ここまで悪党の行動を中心に検討してきた。黒田荘悪党は最終的には悪党として滅びており、時代を変えるような大きな存在にはなれなかったのかもしれない。しかし当初の単発的な行動から、縁者や周辺の荘民を巻き込む地縁的な行動へと変化する一面を確認することができた。

この拙稿を作成するにあたって、大学時代に学んだ実証史学の精神を思い出した。今後の課題としては、いまだ推測に頼っている点を解消するべく新たな史料の検索と、他地域の悪党との比較検討である。また、悪党交名(訴状に出てくる悪党の人物一覧)に関する考察も深めていきたい。

注1…『莊園の研究』 星野書店 1939

注2…『中世の世界の形成』 東京大学出版会 1957

注3…「伊賀国黒田荘の悪党」

(稲垣康彦・永原慶二 『中世の社会と経済』 東京大学出版会 1962)

注4…『東大寺領黒田荘の研究』 校倉書房 2001